第１００号　記念版

平成２６年１０月１日発行

寿楽院寺報

〒369-1245 深谷市荒川９８３
高野山真言宗　荒澤山 寿 楽 院
住 職　髙 橋 敬 行
電話　048-584-0302

六種の仏道

お彼岸ほ、日本仏教徒の仏道修行週間です。仏教徒でなくとも、日本人なら誰でも知っているお彼岸には、どこの家庭でも必ず、仏さまを大切にまつり、ご先祖さまの供養をいたします。

私たちが仏さまに、いろいろなお供えをいたします中に、六種の供養と申しまして、六種類のお供えがありますが、このお供えをすることが、そのまま六波羅蜜（六つの種類の仏道）の修行になると教えられています。波羅蜜とは梵語の音写で、漢訳したのが彼岸という言葉です。彼岸の意味は、悩みの多いこの岸から、住みよい彼の岸に渡るということで、そのための修行が六つあることから、六波羅蜜と申します。この修行は平素も勿論大切でありますが、特に春分、秋分の前後一週間を、彼岸と名付けるようになったゆえんは、仏教が、右にも左にも片よらない、すべてを超越する、中道を尊ぶ教えですから、季節的に暑くない、寒くもない、そして昼夜の長短の別がない、中道の理にかなった、春秋二期の彼岸という、仏道修行週間になったと思われます。この時期に一層六種の供養をつとめ、ご先祖さまの菩提をお祈りすることは、きわめて大きな意義があります。

六波羅蜜（ろくはらみつ）の一々についてみますと、

一、布施（ふせ）波羅蜜 → 水 → 一滴の水も広くゆきわたり、よくものを潤おし育てます。与え施すことによって執着の心をなくします。（ほどこし）

二、持戒（じかい）波羅蜜 → 塗香（ずこう） → すがすがしい匂いはすべてのものを清めます。規律を守り、自己の欲望に流されぬ心を養います。（おきてを守る）

三、忍辱（にんにく）波羅蜜 → 花 → 美しい花はまろやかに、何ものをも許すことが出来ます。あらゆる苦しみに耐える心根をもつ事が出来ます。（耐え忍ぶ）

四、精進（しょうじん）波羅蜜 → 香（こう） → お香は一度点火すれば休まず怠（おこた）らず、身を焦（こが）し続けます。怠け心に打ち克ち、仏道修行に励みます。（はげみ）

五、禅定（ぜんじょう）波羅蜜 → 飯食（おんじき） → ゆたかな食事は身心を落ちつけます。心の安定を保ち続けます。（しずけさ）

六、智慧（ちえ）波羅蜜 → 灯明 → 明るい光は私白身を、また社会をも照らします。物事の真相を見極めます。（仏のまなこ）

このように、お供えいたします一本の線香にも、一灯のお灯明にも、深い意味がこもっています。仮りにこうした意味の理解に乏しくとも、これを身に行うことで尊い供養となり、大きな功徳となることに相違ありません。お彼岸中は無論のこと、平素もっとめてこの修行を忘れたくないものであります。

南無大師遍照金剛

慈悲（じひ）

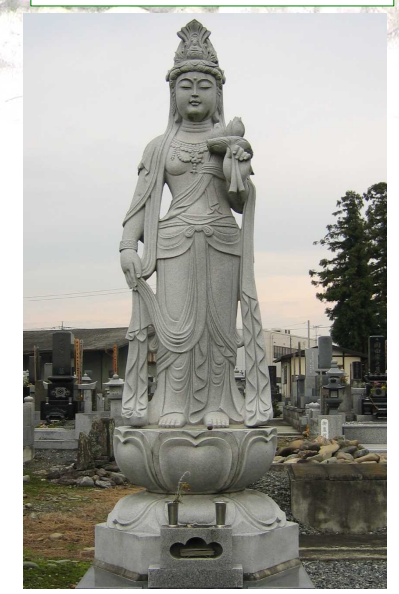
慈悲とは、慈は「楽を与え」、悲は「苦を抜く」という意味であるが、その場合の楽とか苦は、私たちにとって、都合のよいのが楽であり、都合の悪いのが苦であるというレベルのものではない。

悟りの智慧を実現するのが慈悲である。

すなわち「全ての苦が滅して、ただ楽のみがある」の実現である。

仏教が生んだ日本語

聖観世音菩薩



境内の弘法大師尊像

空海の言葉　シリーズ

聖君、その性を奪わずして所を得しむ

「性霊集」

●●●優れた君主は、使える者の性格を生かして、楽しく働かせる

適材適所ということばは、人材というときには必ず出てきます。いうまでもなく「適した材を適したところに使う」ことですが、適材も人材も、同じ材という文字です。材は木材の材で木偏です。材は丸太のことです。人間を丸太にたとえてあるから、人材なのです。

丸太には持ち前の性質があります。松の丸太は油をたっぷり含んでいるから杭になり、桧の丸太は真っ直ぐで香りがよいから柱になります。丸太を加工するにしても、桐は湿気を寄せ付けないからタンスになり、朴（ほう）は乾燥しても割れないから下駄になります。

どの丸太をどこへつかうか。それが「木配（きくば）り」です。